天地　ネットワークテーブル　550号

天地シニアネットワーク　2023．12．16

TENTI　TODAY　気になる話・新書「箱根駅伝は誰のもの」より			1
会員の広場　受信メール			3
随　筆	「日々をいとおしみて」より「上田へ」	宮川典子	3
歴　史	陸奥宗光について―　その2―	臺　一郎	4
歴　史	仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について（2）	佐川雄一	7
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（17）「長崎のみどころ」（5） 「長崎の中にある中国の複雑な背景」（4）	兪彭年	9
回　顧	有楽町慕情（14）「石坂泰三とMRA」（2）	津田孚人	12
講演会	「新三木会」		14
事務局			14

****

TENTI　TODAY

****

今年も残すところ二週間ほどになりました。この1年、天地シニアネットワークにお付き合いいただきありがとうございました。1年が早く過ぎると感じるのは、高齢者になった証拠。今年もこれが最後といろいろと出かけましたが、記憶は不鮮明で思い出すのに苦労し、途中が飛びます。来年がどのような年になるのか見当がつきませんが、皆様、良い年をお迎えください。来年もよろしく。

****

大谷翔平選手の移籍先が、ロスアンゼルス・ドジャーズにやっと決まり、記者会見の模様がテレビで放映されました。大谷選手の活躍のお陰で、米国野球界の人気が回復、アジア系アメリカ人に対する印象が変わってきたと報じられています。スーパーヒーローとなった大谷翔平選手、世界に希望の灯をともしてくれました。

****

大谷選手の契約金を知り、あらためて米国のビジネス界のスケールの大きさに驚きました。1千億円の契約金が実現する米大リーグ、日本のドラフト1位選手の今年の契約金は1億円、日本の経済界の停滞、低落が如実に表れているようです。さらにパリーグ、オリックスの山本由伸投手、ヤクルトの主砲、村上選手と日本の中心選手が、大リーグ入りを表明していますが、当然の流れです。

****

国内を見ると、オールジャパンがガタガタです。政府も、国会も、経済界も、教育界も、医療もマスコミも、スポーツ・芸能界、枚挙にいとまがありません。戦後80年近く、制度疲労が起きていると認識したほうがよいようです。世界情勢は大きく変わろうとしている現在、部分修理ですませず、将来を見据えた、オールジャパンの本格的な再建

論議を始めるときです。
****
人手不足の悪影響が目立ってきました。病院は、医師不足、看護師不足で、病室の稼働が落ち、教育現場も教師不足は深刻のようです。最近は郵便が先方にいつ着くのか心配で、投函日に気を使います。人手不足解消の期待は外国人ですが、日本の賃金が安い上に円安で、なかなか難しそうです。人口減は、国力低下につながります。
****
最近、新聞・ネット・本などに出た「気になる話」
「箱根駅伝は誰のものか（国民的行事の現在地）」酒井正人著・平凡社新書
（抜粋）
　日本陸上界の中で「箱根駅伝」は異質な存在だ。熱狂的な人気と、巨大なマネーを動かす一方で、他種目の選手からは妬まれている。長距離以外の種目でオリンピックに出場した元選手は、「僕らはオリンピックに出てもさほど騒がれなかったですけど、長距離は箱根に出るだけで＜凄い＞と言われるんです」と苦笑いしていた。
　箱根駅伝・常連校の某監督も、「テレビのおかげで箱根駅伝が大きくなったのは間違いないのですが、その弊害もあります。全国で一番になったわけでもないのに、関東のローカル大会で少し活躍しただけで、マスコミが取り上げてくれるので勘違いしている子がいるんですよ」と漏らしている。
　他の種目では、世界大会に出場経験のある選手くらいしか取材は殺到しないが、長距離種目は、入賞しなかった選手でも記者やカメラマンに囲まれる。

　箱根駅伝の人気が高まるにつれて、有力選手の場合は、「優勝を狙える大学」「世界を目指せる大学」「練習環境の良い大学」「「入学条件の良い大学」を吟味して、選ぶことが出来るようになってきた。その結果、“マネーゲーム”がエスカレートする一方だ。
　授業料免除の選手を１０人近くもスポーツ推薦枠で獲得している大学がある。高校のトップクラスの選手になると、授業料免除はあたりまえで、プラスアルファが必要になってくる場合もある。具体的に言うと、寮費、食事代、合宿代を大学が負担。さらに返済不要の奨学金を用意しているチームもある。
　ある強豪大学は特待生が４段階あり、Ｃは授業料、寮費免除、Ｂはさらにプラスして５万円の奨学金、Ａ は月に１０万円、Ｓは月に１５万円と奨学金がアップする。高校時代の実績と期待度に応じて、選手への”報酬”が変わってくる。
　別の大学では月に３０万円という奨学金を手にしている選手もいる。筆者の知る限りの最高額で、それだけの奨学金を複数の大学が準備している。
　「令和４年賃金構造基本統計調査」によると、大卒の初任給は２２万８５００円。この額を優に超える金額を受け取る選手を「アマチュア選手」「学生ランナー」と呼べるのだろうか。
　箱根駅伝が華やかすぎるため、実業団に進んだ選手たちは目標を失ってしまう。オリンピックのマラソン代表選手にでもならない限り、学生時代ほどには世間はチヤホヤしてくれない。一般的な学生が経験する「一般入試」「アルバイト」「就職活動」をまったく経験していない。
　競技を引退した後に特別待遇が終わってしまい、企業での一般業務に専念するようになると、苦悩が多くなる。実業団チームでは一般業務は半日ほどで、あとは練習に集中できる企業が一般的。選手は合宿で職場を離れることも多いため、責任あ

る業務を任される機会は少ない。競技を長年頑張れば頑張るほど、同世代の社員との経験差は開いていく。
　最近は「契約選手」も増えて来た。一般業務は免除され、報酬は高いが、契約が終了すれば、新たな職を探す必要に迫られる。
箱根駅伝は、学生ランナーの夢でありながら、選手たちの人生を翻弄している。
****

会員の広場

****
受信メール
****
SDGs（持続的な開発目標）が浸透されるようになりましたが、次は「ウェルビーング（Wellbeing）」という言葉がくるのかもしれません。最近いろんな企業がウェルビーング経営などと言い始めています。一人一人の幸せ、心地よい空間という意味のようですが、個人的には富裕層の余裕のある人しか今は使えない気がします。
不況の中、日々の生活に追われている若い年代の人にはウェルビーングを考える余裕がないので今は響かないのではないでしょうか。だからこそ、「ウェルビーング」という意識が必要なのかもしれませんね。ウェルビーングをテーマにしたウェブサイトのようです。時間があったらアクセスしてみてください。（ヤング・ウォッチャー）
https://wellulu.com/
****

連　載

****

エッセイ集　　宮川典子（９４歳）　「日々をいとおしみて」（２０２２年１１月）より

「上田へ」
　十月半ばの週末、息子夫婦と列車で別所温泉に行った。曇天の関東平野から県境のトンネルを抜けると、信州は別天地。まばゆい日が輝いていた。上田駅で別所線に乗り換える。車内は私たちと十五人ほどのグループのみで、和気あいあい。後部にいた男性が「皆さん外を見てください。かかしがお客様を歓迎していますよ」。見るとホームにも沿線の畠の中にも、農作業の夫婦、酒を飲む男、あるところでは百人の子供が池の周りで遊んでいる。この沿線の作ったかかしで、自分たちの住む土地を心から大切に思っているのが感じ取れる。
　隣に座っていた人がささやく。「あの人、今日は我々のリーダーですが、昨年までは上田市長だったのですよ」。彼は沿線の見所も説明するし、車掌だとばかり思っていたのでびっくりした。三十分で終点着。

　宿に荷物を預け、寺詣でを始める。先ず安楽寺へ。あらかじめ散歩ガイドを見て覚悟はしていたが、本堂への階段が余りにも急なのに驚いた。手摺が全くなく、息子の袖先をつかんで慎重に上がった。踏み面の狭い石段が五十段も続く。本堂にお参りして、さらに高い所にある三重の塔を拝観する。全国唯一現存する木造八角堂で、国宝に指定されている。

ここも、次に行った常楽寺も、翌日早朝行った北向き観音も、鎌倉時代からの古刹で、全国から学僧が仏典を学びに集まったそうだ。いずれも立派な仏像が安置され、古びた本堂がいかめしい。また境内は良く手入れされていた。

安楽寺のコウヤマキは、天高くそびえ立つ完全な円すい形を保ち、常楽寺の松は、中央にどっしりと太い幹を伸ばし、地面に這う枝もそれに負けず、深い緑の葉を茂らせていた。

ここ上田市は広い盆地なので、やや遠くに山々を見渡せて心が和む。近くの山は木々が幾分黄色がかかっているし、所々カエデが、美しい紅を見せていた。一日目の夜中に降り出した雨は、宿を出る朝には止んで、二日目も秋晴れだった。

上田駅に戻り、城址公園に行く。真田昌幸が築城、徳川の大軍を二度も退けた名城だったが、今は立派なやぐら門が一つと、やぐらが三つ残っているのみ、市民の憩いの場となっている。園内にある真田神社にお参りする人の列が絶えない。
真田一族。殊に幸村への愛惜の念を誰しもが持っているのだと思う。

最後に旧北国街道の柳町へ行く。昔ながらの街並みを残し、格子造りや蔵造りの家々が軒を連ねている。そば屋で遅い昼食をとった。その味のすばらしさ。息子もすぐ近くの酒蔵で醸造された「亀齢」という酒を飲み、恵まれたこの旅を喜び合った。しかし、昔の人は半てん、脚絆、わらじの出で立ちで、こういう宿場を通り、江戸まで歩いたのだと感服する。

新幹線で東京に帰ると、日は暮れていた。旅は計画中から胸が躍り、目的地に着けば、名所巡りに一日一万歩歩いても疲れはなく、帰宅後も思い出にふける。
老い先短い私に、なおも生き甲斐を与えてくれるものである。

****

陸奥宗光について－その２＝　　臺　一郎　（７５歳）

（文中の人物名は敬称略）

シュタイン教授

西園寺公望

陸奥亮子

（

前回の－その１－では陸奥宗光の生涯を大まかに紹介した。今回はその人物像や性格などを紹介する。

陸奥は非常に頭の良い人物である。明治 23 年の 5 月、第一次山縣有朋内閣で農商務大臣に就任以降しばしばカミソリ大臣との異名を持ち、回転が速く、一を聞いて十を知るような頭脳は部下からも恐れられた。

陸奥の思考方法について、祖父が陸奥の従兄弟で、外務省退官後は外交評論

家となった岡崎冬彦は著書『陸奥宗光』で、「担当直入で、問題点の本質を捉え、しかも問題意識が完全に解明されるまで執拗に食いついて離さない」と指摘している。
　また陸奥の性格や性分については、「与えられた任務は徹底的に遂行しようとするところがあった」と述べており、例えば明治初年には自分の軽蔑する大隈重信の下で日本最初の予算書を作成したとか、一度は辞表した大隈外務大臣の下で大隈のやろうとした条約改正を成功させるために最後まで投げずに奮闘した等のエピソードを紹介している。

　ところで陸奥は頭脳が非常に優れているだけでなく、人並み外れた大変な努力家でもあったようだ。前回の原稿でも書いたように、陸奥は明治 16 年に宮城刑務所を出所し、翌明治 17 年（1884 年）から明治 19 年（1886 年）まで、英国とオーストリーに留学と言っても良い外遊を行った。
　この２年間で陸奥が学び、思索したことは、我が国が岩倉具視や伊藤博文の主導のもとで英国型憲法に基づく責任内閣制ではなく、先ずはプロシャ型憲法に基づく立憲君主制の導入を選択したことについて、それが果たして適切な判断や選択であったのかを彼なりに徹底的に考察・検証することであった。
　そのため陸奥は、ロンドンではケンブリッジ大学講師のワラカー博士との個人面談を、そしてウィーンではウィーン大学教授シュタインとの個人面談を通じて深く思索し考察して、その成果を大型のノート7冊にまとめた。

　これらのノートは細かな手書き文字でびっしりと書かれており、中には 350 ページにも及ぶ分厚いノートも含まれている。しかも凄いのは、その全てを陸奥が独学で習得した英語で書いているという点だ。
　実際に現物を読んだ岡崎冬彦によれば、陸奥の英文の特徴は簡潔且つ文意暢達であるという。また陸奥が独学で習得した英語のレベルについて、岡崎は著書『陸奥宗光』の中で、文法は完璧で全体的には現在の外務省のベテラン外交官のレベルに匹敵すると書いている。
　またノートの中にはワラカー博士やシュタイン教授に読んでもらい、論評や助言をもらうために書かれた部分も含まれていて、それらは花文字の頭文字で始まる驚くほど美しい手書きの英文で書かれているという。ちなみに、陸奥宗光の欧州外遊ノートの現物は、現在も神奈川県の金沢文庫に保管されている。

　ところで陸奥はヨーロッパ滞在中、持病の肺結核が悪化したが、にもかかわらず連日 10 時間以上を勉強にあてたようだ。そういえば陸奥は山形や宮城の刑務所に収監中も連日 8 時間以上を読書や英語原書の翻訳に充てており、時間さえあれば勉強するタイプの人間なのだろう。
　陸奥がロンドンやウィーンに滞在していた頃、日本国の駐オーストリー公使としてウィーンに滞在していた西園寺公望は、伊藤博文宛ての手紙に滞欧中の陸奥の様子や日本に帰国後の扱い等について以下のように書いている。
　「陸奥氏の滞欧中は大変な勉強ぶりでした。帰国後お会いになれば、きっと見違えるようになったとお感じになるでしょう。私が考えるには、陸奥のような人物を民間に遊ばせておいては、本人にとっても損ですが、政府にとっても得策とは言いがたく、願わくば速やかに政府にご採用になってはいかがでしょう」と。

　また、ウィーンからロンドンに戻った陸奥は自分が作成した講義録をシュタイン教

授宛に送ったが、それを読んだシュタインは返信の中で次のように陸奥を称賛している。
（岡崎冬彦の翻訳）「講義録を拝受しました。自分は単に熟読したというだけでなく、甚だ愉快に感じました。わずか数ヶ月間に数百ページの原稿を整理することは容易なことではなく、大変なご勉強です。私のような歳になると種々心に期したことも中途半端で終わってしまうことも多いので、貴兄から送付の議事録がかくも完全なことを拝見するにつけ、感に堪えません。（途中省略）貴兄がご帰国の上はきっとめざましいご活躍のことと期待しております。日本人は知力が優れているだけでなく、精神が高尚なことは私がよく知っているところです。そして繰り返して申し上げますが、貴兄が行政学の諸問題について、その大要も詳細もご理解されたことをお祝い申し上げます。〈途中省略〉貴兄ご帰国の後、伊藤博文伯爵にお会いの節は、伊藤氏に対する私の誠意と尊敬は少しも変わらない旨をお伝えください。またご帰国の上はどうぞ時々日本の事情をお知らせ下さい。お別れに際してこの手紙を差し上げます。
1885 年 12 月 1 日　学士シュタイン　」

ところで、カミソリなどと呼ばれた陸奥は、ややもすると合理的で功利的な冷たい人間と思われがちだが、妻亮子に対しては深い愛情を持った人間であった。陸奥は明治 11 年に政治犯として逮捕されたために、明治 16 年に特赦で釈放されるまでの約 5 年間、妻の亮子は夫が入獄中という肩身の狭い思いで留守宅を守った。
そしてようやく陸奥が釈放されたと思ったら、翌年から今度は2年間の欧州外遊へと旅立ってしまったのである。またも留守宅を亮子任せにした陸奥は、この間に 50 通もの手紙を亮子に出している。当時、ロンドンから日本への郵船便は二週間に一度、つまり一年間で 24 便が運航されていたので、陸奥は日本へのほぼ全ての郵船便で亮子への手紙を出し続けていたことになる。
手紙の内容は陸奥が留守中の亮子の心がけや、夫婦は道連れの旅人などの陸奥の想いを書いたものであった。例えば明治 17 年 6 月 18 日の手紙では、『今回の留守はその前の留守（入獄による留守）とは違うけれど、その代わりにこの前よりはいろいろと難しいこともあるでしょうから、くれぐれも他人に笑われないようにしてください。（途中省略）
いつも言っているように、夫婦は道連れの旅人ですから、晴雨寒暑は共にすべきもので、このことは同居していても、分かれていても、変わりないことです』と書いている。
また亮子が陸奥の母親の最期を看取ってくれたことへの感謝の気持ちを込めた手紙では、『願わざることなれど、もし御身（亮子）が病気などの時は直ちに電信にてお知らせなさるべく候。小生は何時にても帰国いたし申すべく候』と書いている。

明治 19 年（1886 年）2月、陸奥は欧州外遊を終えて帰国した。そして 10 月には外務省に出仕した。地位と待遇は勅任官二等、年俸二千三百円であった。維新以来の陸奥の経歴からすれば明らかに不適当な低い地位であり待遇であった。陸奥の友人達はとても祝福できないと大いに失望・落胆した。
維新後間もない 30 歳頃の陸奥であれば、憤然として蹴ったような条件であったが、陸奥は文句も不満も言わず、淡々としてこれを受けた。政治犯として5年間の刑罰を受けた自分を物心両面で援助し、あまつさえ欧州に外遊までさせてくれ、更に帰国後直ぐに外務官僚として採用してくれた伊藤博文等の好意には素直に答えるべきと考えたのだろう。入獄以来 8 年近い年月は、陸奥を人間的にも大きく成長させたようだ。

さて陸奥の人物像を語る上でどうしても外せない点、それは彼が理性的ではあるが熱烈な愛国主義者であったという点である。幕末に徳川幕府が西欧列強と締結した不平等な修好条約の改正こそは、陸奥が外務官僚として、また外務大臣として懸命に取り組み、ついになし得た、当時の日本にとっては最重要な外交的課題であり、それに向かう陸奥の姿勢は強い愛国主義の表れであった。またそれに続く日清戦争における勝利への外交的貢献や戦後の講和条約での国益追求への懸命な姿勢も、彼の愛国への熱い想いのなせるものであった。

以上の人物論を経た本稿の最後の項目は、近代国家日本の実現に向けての陸奥の貢献や成果の紹介だが、それは次回に投稿する。

****

仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について　　佐川　雄一（８６歳）（２）

３.「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」をまとめたロベール・シューマンとジャン・モネとはどんな人物であったのか

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、仏独は 3 度戦いを重ねた。1870 – ‘71 年の普仏戦争ではプロイセン王国が中心となったドイツが勝利しビスマルク宰相率いるドイツ帝国が誕生する。1914–‘18 年の第一次大戦では連合国側に付いたフランスが勝利、1939–‘45 年の第二次大戦でも米英ソとともに戦ったフランスが勝利する。度重なる戦争の災禍を経て仏独は、戦争が、最適の問題・紛争解決策にはなり得ないことを学んだ。これら輻輳した国際関係の難しさを熟知したフランス人のロベール・シューマンとジャン・モネは、仏独の宥和と、その後の欧州の安定・平和・経済繁栄・市民の自由の礎を築くことになる。二人の人物像を探ってみたい。

3-1. ロベール・シューマン（1886 – 1963 年）

ロベール・シューマンは、その誕生・経歴から仏独宥和を象徴するに相応しい人材であることがわかる。

シューマンの父ジャン・ピエール・シューマンは、ルクセンブルクとの国境に近いロレーヌ地方で生まれたフランス市民であったが、ドイツがフランスとの普仏戦争（1870–‘71 年）で勝利すると、ロレーヌ地方がドイツ帝国領になる。その結果、父親の国籍はフランスからドイツに変わった。

ロベール・シューマンの母はルクセンブルク人であったが、父ジャン＝ピエールと 1884 年に結婚するとドイツ国籍を取得した。ロベール・シューマンは、この二人を両親に 1886 年、ルクセンブルクで生まれ、血統主義により国籍はドイツ人となった。

しかし、第一次大戦後（1919 年）、アルザス・ロレーヌが再びフランスに奪還されると、33 歳になっていたロベールは、フランス国籍を取得した。

ロベールの第一言語は、ルクセンブルク語、ドイツ語、当時、ドイツ国籍であった。ロベール・シューマンは大学教育をドイツのボン大学、ミュンヘン大学、ベルリン大学で学び、さらにフランス アルザスのストラスブール大学で学位を取得する。シューマンが話すフランス語はドイツ語訛りで、完璧ではなかったという。

しかし、第一次世界大戦後、フランス政界で活動を始め、大戦中はナチス当局に逮捕されるが、1942 年に脱獄、戦後、財務大臣になる。1947 年から 48 年まで首相を務め、その後、外務大臣（1948～52 年）になった。

シューマンは、33 歳でフランス国籍を取得した異質のフランス人であったが、時代が許容したのか、戦後、フランスで財務大臣・首相・外務大臣の地位を獲得する。このような独仏の歴史の嵐の中で自分の人生が翻弄されてきたシューマンにとって「独仏問題」の恒久的な解決はまさに「渡りに船」であった。外務大臣在籍時、シューマンは独仏和解に向けて大胆な発想で「石炭鉄鋼共同体」を誕生させた。シューマンの性格は、謙虚・地味、宗教に深く関わり、生涯を独身で過ごしたが、後年、欧州議会の議長を務めた。

欧州連合（EU）の本拠はベルギーのブリュッセルにあるが、本拠ビルの前にシューマンの銅像が立ち、本拠に隣接した地下鉄駅名はシューマンに因んでシューマン駅と名付けられている。シューマンは仏独和解の次に、欧州の連合に働いた実績が評価され,「欧州の父」として欧州の人々に敬愛されている。

3-2. ジャン・モネ（1888～1979 年）

ジャン・モネは、フランスで政治家として活動する以前は、産業人として国内のみならず国際的にも活躍し、ロンドンやアメリカに滞在した時期があった。第一次大戦終了後は国際連盟の事務次長（1919～23 年）を務める。新渡戸稲造が同時期、国際連盟の事務次長を歴任しているが、二人は時期が重なっているところから友人同士であったと推察される。

モネは、その後 1938 年まで故郷のコニャックに戻り、家業（醸造所）の経営に関わるが、第二次世界大戦中は、フランスとイギリスの軍事物資を管理する共同委員会の特別委員長に就任、戦後はフランスの産業復興に尽力する。尚、欧州石炭鉄鋼共同体のプランを最初に考えたのは、当時、フランス企画院長官であったジャン・モネである。

モネは、戦争に明け暮れてきた欧州を平和にするため、戦争を物理的に不可能にする方策を考え、少数の専門家による集中的な議論を通して、独仏の石炭と鉄鋼の資源を国際機関の管理下に置く事業案を取りまとめた。これがロベール・シューマン外相の強い推挙を受けて前に進むことになった。

モネは、欧州石炭鉄鋼共同体の構想段階で調査・研究委員会の議長となり、欧州石炭鉄鋼共同体が設立されると同共同体最高機関の初代委員長（1952～54 年）に就任した。モネは、シューマンと同じく「欧州連合の父」と呼ばれている。

ロベール・シューマン

ジャン・モネ

****

「了解日本」(「日本を知る」（第１７回）　　俞彭年　（８６歳）

長崎の見どころ（５）

長崎の中にある中国の複雑な背景

最新の実用中国地図帳（1998 年成都地図出版社）、1 ページ目の中国の政治的に関心のある日本の場所として、東京、大阪、長崎の 3 つをあげている。 東京や大阪と並んで長崎が目立つのは、長崎の中にある中国の根底にある複雑さが関係しているのだろう。

中国と日本の民間貿易が日本で「唐船貿易」と呼ばれていた明・清時代、日本は長崎（現・長崎市）1 港のみを開港した。 この対外貿易の独占は、長崎の経済・社会の空前の発展をもたらし、貿易に伴ってやって来た唐人たちは、中国製品だけでなく、建築技術、書画、民俗、食文化などの中国文化をもたらし、長崎をかつてない文化の発展と繁栄の地としたのであった。

現在の長崎には、中国文化の痕跡が随所に見られる。 長崎唐人屋敷跡には唐人が建てた土神堂、天后堂、観音堂があり、観音堂は現在福建会館といわれて上海から長崎県に贈られた孫文の銅像が中庭に建っている。

日本の神戸、横浜、長崎には中華街があり、日本三大中華街の一つである長崎中華街、規模は小さいが、牌楼上には王震同志が書いた「長崎新地中華街」の題詞が飾ってある。

明朝の高僧超然が建立し、日本国宝に指定された黄檗宗の寺院崇福寺は、国宝 2 点、重要文化財 5 点を収蔵している。

明朝の僧侶如定が建立し、日本の重要文化財に指定されている、2 連アーチの石橋（通称：めがね橋）や、72 弟子の石像が寺院内にあるといわれる「孔子廟」があり、現在は北京故宮博物院文物の展示が常時行われている。

その他、「黄檗三筆」と呼ばれる高僧隠元の墨宝、中国に由来する毎年夏に開催される伝統的なドラゴンボートレース、中国同様に毎年 8 月 15 日に行われる死者慰霊式では精霊船を放つ。毎年春節から元宵節まで開催される長崎ランタンフェスティバル、おめでたい日にはにぎやかな中国式の獅子舞などがある。

食文化では、中国から黄檗僧によって長崎にもたらされた精進料理で、崇福寺や万福寺で有名な「普茶料理」。もともと長崎の中国人労働者の食事として提供されていたが、全国に知られて長崎名物に発展した「ちゃんぽん」がある。

また中国の両面黄焼そばの影響で生まれた長崎チャンポン焼そばも人気があり、細麺を揚げ、野菜、豚肉、海鮮のとろみをつけたチャンポンをかける。長崎チャンポンを代表する長崎で最も人気のある中国要素を含む麺を構成している。

中国から伝わったトンボ肉饅頭も長崎を代表する、中国の元素を含む食品で、人々の人気を集めている。5 月 5 日の端午の節句になると、人々は唐人に粽を食べ

ることを学び、これはすでに長崎人の習慣になっている。
　長崎で有名な「卓袱料理」は中国料理の日本化で、中国人の食べ方を学び、料理は大きな皿や椀に盛られ、冷菜、温菜、肴など、各自が自分の料理を取って食べる。インゲン豆は、1655 年、中国の僧侶隠元が厦門から長崎に招かれた際に持ち込んだのが始まりである。
　また、日本は中国の先進文化を学ぶために遣隋使と遣唐使を派遣し、いずれも長崎県の壱岐、対馬、あるいは五島を経て大陸に赴き、五島には留学僧空海の「辞本涯碑」（日本の西の最果てを離れるという意味）が残っている。
　長崎県平戸市と五島市には倭寇の首領王直の遺跡があり、明・清の時代に台湾を回復した名将、鄭成功の母は長崎県平戸の出身で、日本人は鄭成功を国性爺と呼んでいる（日本の著名な作家近松門左衛らの浄瑠璃人形劇『国性爺合戦』から来て、この劇は鄭成功の史実を物語の内容としているが、「国姓爺」を「国性爺」と書いた）。平戸市には鄭成功の生まれ育った時の遺跡がある。

　20 世紀以前は長崎にやってきたのは中国人だったが、20 世紀に入っての前半、長崎県民や他地域の日本人が大量に中国大陸にやって来た。『上海通史民国社会』によると、上海の日本人数は 1939 年 1 月に 37,871 人、1945 年 12 月に 72,654 人で、上海の虹口地区は特に日本人が多く、吳淞路周辺は日本人街と化した。
　当時、大陸に行くのは海運で、日本が開設した長崎—上海間の定期便があり、長崎は中国大陸と日本の間の海上往来の必須の場所となっていた。1990 年代、長崎には上海と協力して長崎-上海間の定期便を復活させた会社があったが、かつての汽船時代ではなく、時代はすでに飛行機の時代に入っているため、飛行機で 1 時間 15 分しかかからないのに、定期便で 24 時間以上もかかるため、経営難で運航を止めた。1979 年に東方航空は上海-長崎定期航空路線を開設した。
　なお、20 世紀 3、40 年代の定期船が後に止まったのは戦争のためで、航路の定期船はすべて爆沈され、航路を走る船はなく、日本が降伏してから自然とこの海上航路も消えてしまった。
　私たち長崎県民にとって、当時は上海に行くのは簡単で、パスポートもビザも必要なく、チケットを買って船に乗るだけで、普段の街をぶらぶらしているように下駄を履いて街をぶらぶら出来たのはよかったと、多くの長崎県民の先輩から何度か聞かされたことがある。多くの新華僑や新華人が、日本各地を旅して、長崎は中国人にとって最も温かく、歓迎される場所だと言っている。 これは偶然ではなく、長崎が持つ中国情緒の遺産によるものだと思う。

　現在、長崎県は観光を経済発展の優先課題とし、「観光立県」の方針を掲げ、中国市場の拡大や中国人観光客の観光・保養の誘致に力を入れている。 長崎県の産業構造は、この方針を反映して、2005 年には一次産業が 2.8%、二次産業が 17.5%、三次産業が 83.8%となっている。
　長崎県は、海岸線 4,203km、595 の島々（うち 73 は有人島）、陸地に山が多く平地が少ない、曲がりくねった起伏のある地形、多数の半島や岬、湾、湖などが複雑に絡み合う海岸線、豊かな山、火山、多くの温泉、国立公園 2 箇所、県の自然公園 6 箇所と観光資源豊かな地域である。
　長崎は、日本人がオランダなどの中国や西洋の影響を受けたエキゾチックな場所と表現しているので、長崎はエキゾチックさを観光のセールスポイントにしているのである。 また、中国と西洋の要素を取り入れた食文化や、豊富な水産資源、農産物、

果物などもセールスポイントである。 すでにブランド化している食品としては、長崎イチゴ、長崎ハニーオレンジ、長崎ビワ、長崎アスパラガス、長崎ジャガイモ、長崎和牛、長崎金華竹、長崎三線イソメ、長崎アカヒレなどがある。

私の経験では、長崎の夏は「冷やしそうめん」、秋冬は「焼き牡蠣」が独特の風味で、全国に喜ばれているようである。 また、長崎は 400 年の伝統を持つ「波佐見焼」「三川内焼」などの陶磁器の産地としても有名で、陶磁器好きなら、陶磁器産地区を回る価値があり、きっと多くの収穫があるに違いない。 とにかく、長崎は、いい人、いい水、いい空気、山、海、島、火山、温泉、そしておいしい食べ物があり、観光に最適な場所であり、リラックスできる場所でもある。 長崎で仕事をしていた頃、毎週末、大村湾の端にある喜道庵という温泉に行き、疲れを癒していたが、その時のことは今でも忘れられない思い出である。 常連になるうちに、喜道庵の人たちと親しくなり、2005 年 3 月、彼らに向けて次のような詩を書いた。

长崎温泉喜道庵	長崎温泉・喜道庵
免费接送好去处	送迎は無料でサービスが良い
屋内屋外两浴池	屋内屋外 2 つの浴場
钠碳酸氢盐质泉	泉質は重炭酸ソーダ
清澈滑腻不停流	透明で滑らかな湯、絶え間ない流れ
宽敞幽静可悠哉	静かな幽玄の世界で悠然とし
静心常泡益健康	心静かにして温泉に入れば健康によい
依山傍海景色秀	山は近く海の景色は素晴らしい
心旷神怡赏外景	外の景色で心は晴れ晴れとし
极目海天远山朦	海や空や山をはるか遠くに見る
洗清舒展该用餐	温泉でサッパリとして、此処で食事
美味和餐一心亭	一心亭の日本食は美味しい
色香味形特讲究	色、香、味、形にこだわる
靠海吃海格外鲜	海辺で食べる海の幸は殊のほか新鮮
饱食休息重又泡	食事を終わり、一休みして再び温泉へ
眼福口福加泡福	見て楽しみ食べて楽しみ温泉を楽しむ
人生乐趣集一处	人生の楽しみが一つところに集まる
涛声遐想大自然	寄せ来る波の音で大自然に思いをはせ
天赐人间享福泉	天が人間に与えた幸の泉を享受
不虚此行眼界开	この旅は有意義で世界が広がる

（天地シニアの粗訳）

長崎県の面積は大きくなく 4095.55 平方キロ（島の面積は 45.6%）、東西 213 キロ、南北 307 キロ。人口も多くなく、144 万人余り（2008 年の数字）だった。地理的には日本の最西端に位置し、東海を挟んで中国大陸と離れているが、上海からは 850 キロ、東京からは 1000 キロも離れているので、長崎県の前知事金子原二郎氏は何度か筆者に言った。「私たち長崎は中国に最も近い。長崎で長崎雄鶏が鳴くと上海で聞こえる。上海へ行くには飛行機で 1 時間 1 分、東京へ行くには 1 時間 3 分、今後の長崎の発展は東京ではなく中国にかかっている」と。

****

有楽町　慕情　（１４）　　津田孚人（８６歳）

石坂泰三とＭＲＡ　（２）

参考:「日本の進路を決めた１０年」（元ＭＲＡ　日本駐在代表・バズル・エンド　ウィッスル著、藤田幸久訳）（発行所ジャパンタイムズ）

石坂泰三たちが参加した、昭和２５年６月、スイスのコ―（ＣＡＵＸ）のＭＲＡ本部で開かれた国際会議、参加した日本人一行は６６人、立場の違う人達が幾人も含まれていた。

日本人参加者は、会議では個人的なことより政策的な発言を多くした。例えば、元大臣の北村徳太郎は、「国土面積が世界第３０位の我が国は、世界第６位の人口を擁し、しかも耕作可能面積は国土のわずか１５．５％だが労働人口の５３％が農業に従事している。戦争で、１２０以上の都市が焼失し膨大な被害を受けた。その中から、新しい経済を打ち立てるのが急務。しかし、それ以上にもっと重要な課題は、国の道徳の復興。私たちは、此の地コーで見いだした精神こそが国の道義と経済構造を再建する道であることを見つけた」と発言した。

吉田茂首相の代理として使節に参加した栗山長次郎は、「絶対正直という言葉を聞くと日本人は深い動揺を覚える。日本の税制では、税金を全額支払ったら最低必要な生活費など残らない。しかし、参加者の中には、元大蔵大臣と財政の専門家である社会党議員を含む６人の国会議員がいるので何かができると思う。少なくとも、正直な納税が可能な税制を期待する」と発言している。

ただし、最年少の国会議員・中曽根康弘は、「必ず総理大臣になって見せる」と、著者に意気込んでいた。

６月２５日、朝鮮動乱が勃発した。一行の動揺は大きく、参加している知事たちの中には、帰国して緊急事態に対処すべきと考える者もいた一方、性急な動きをせずに旅を続けるようにと日本からの手紙を受け取る者もいた。もし日本が攻撃を受けてもアメリカが防御してくれるという安心感があり、使節団の旅はそのまま続けることになった。スイスでは、各地市長のレセプション、ジュネーブでは国際赤十字総裁が一行を迎えた。

西ドイツではデュッセルドルフで市長らの出迎えを受け、ボンでは一行のうちの十数人のメンバーがアデナウアー首相と会談した。会見は三十分に及び、カメラの放列の前で握手と言葉を交わした。

その後一行は、３グループに分かれ、１グループはハンブルグとブレーメンの港湾指導者との会合、１グループは市長の招きで西ベルリンに行き、１グループはルール地方の炭鉱、工場、住宅団地を見学した。

つづいてフランスに行き、パリを訪問した。国会主催のレセプション、外務省主催のレセプション、市長主催のレセプションがあり、七月十四日のパリ祭では、オリオール大統領の特別席に一行は招かれた。

次の訪問地ロンドンは、それまでと様子が異なった。戦争の傷跡が生々しく残り、

かつての敵国民を迎え入れるのに人々は警戒的だった。英国のメディアは、着物や箸に興味を集中させ、一行が伝えたかった日本という国や、その考え方、世界観にはほとんど関心を示さなかった。
　それでも6日間の英国滞在中に、ロンドン市長による公式レセプションがあり、オックスフォードでも市長や大学の総長による会合がもたれた。
　ロンドンのウェストハムの市民ホールで開かれた一般集会では、９００人収容のホールに１５００人の市民が集まり大喝采で迎えてくれた。
　ニューヨークへ出発のとき、一行は、報道陣を前にＭＲＡ の先駆者ブックマン博士と彼のグループ、そして温かく歓迎してくれたヨーロッパの方々への感謝を伝え、「日本は過去において誤った考えと道を歩んでヨーロッパの方々に多大の苦しみを与えた。これから私たちは、心を入れ替え、世界を造り変えることに貢献できるということを国としての行動によって示していきたい」という声明をだした。

　ニューヨークでのハイライトは、当時ロングアイランドのレイクサクセスにあった国連本部への訪問であった。長い間事務総長を務めているトリグブ・リーが一行を出向かへてくれたが、リー事務総長は、日本が国連に参加するよう初めて招聘してくれた人物であった。北村は、「きょうここを訪れた日本人は、われわれが極東で引き起こしたトラブルに恥じ入り深く責任を痛感している。国連が平和維持のためにとっている速やかな動きに感謝している」と伝えたが、日本の参加は、講和条約調印まで待たねばならなかった。
　ワシントンでは、初日に上院でのレセプション、下院での昼食会、国務省によるレセプション、と3つの大きな行事が組まれていた。不安そうな面持ちで議会議事堂に到着した一行は、副大統領のアルベン・バークレー上院議員の事務所に案内された。一人ひとりと挨拶した後、一行の中の国会議員は上院議場の議員席に、ほかの人たちは、外交団用傍聴席に案内された。
　一行を上院議員たちに紹介した後、一時的に断たれた日米両国間の長い友好関係に触れ、此の友情が「ただ単に復活するだけでなく、両国間の永遠の存在となって欲しい」と述べた。
　つづいて、民主党、共和党の議員、各二人が演説した後、バークレー副大統領は、吉田首相の代理として参加していた栗山長次郎議員を演説するように招いた。通訳は、西山千がした。
　栗山は、「ほぼ1世紀にもわたる両国間の友好関係を日本が破ってしまったことは誠に遺憾です。われわれのかような失敗にもかかわらず寛大なアメリカは日本を許し、日本の存続を認め、さらに復興の援助をしてくれました」「北朝鮮の無法な侵略はまたしても大きなアメリカを大きな犠牲に巻き込んでいる。日本としては国連のとった行動を心から応援するとともに、トルーマン大統領の勇気ある指導制に高い敬意を払うものです。日本がアメリカとの協力関係においてどんな形でお役に立てるのか示していただきたい」と演説をした。
　この議会での栗山の演説を、ニューヨーク・タイムズ紙は社説で次のようにとり上げた。「ワシントンでのこうした出来事が広島と長崎に原子爆弾が投下されてからわずか5年足らずに起きたのである。一行の中には広島と長崎の市長も含まれている。彼らの方でも許すべき何かを感じてくれたとすれば、それは大変な奇跡と言えよう。現在の暗闇を抜けてすべての人類が兄弟となる未来を見ることが出来る。」
　ワシントンＤＣ委員会室で行われた昼食会には上下両院議員が多数参加した。さらに一行は、ジョン・フォスター・ダレスや、ディ―ン・ラスク国務次官補などにも会い、

ワシントンでの最終日には、下院へ招かれた。外国代表が下院議場に入るのは、初めてのことだった。
　そのあと、ロサンゼルス、に行き、最後の訪問地はサンフランシスコであった。８月１６日帰国に当たって一行は次のような声明を発表した。
「帰国にあたって私たちはマッカーサー将軍の賢明な指導のもとに健全な民主主義の砦を築きたいと思います。日本における将軍の偉大な業績に深く感謝するとともに、国連の旗のもとに両国共通の自由を守るためのトルーマン大統領並びにアメリカ国民の勇気ある犠牲的行動をできる限り支援したいと思います。私たちはアメリカの信頼できるパートナ―としてアジアの復興に協力することによって過去の過ちを償いたいと思います。」
「共産化されていない東洋の国々に欠如している理念を埋める新しいイデオロギーを求めて私たちは欧米に来ました。その答えをスイス、コーのＭＲＡ 世界会議で見いだすことができ、しかもそれがさまざまな国で実践されているのを実際に見ることが出来ました。四つの道徳基準が人生に与える挑戦は、一人ひとりの心を照らしてくれたと同時に、多くの分野でそれが適用されるべきかもはっきり認識できました。この理念は日本の将来ばかりでなく世界を造り直すという東洋と西洋の新しい共同事業の鍵になると思われます。」
訪れた国の人々に対して、一行は大きな貢献を果たした。
（つづく）
****

講演会のご案内

****
●新三木会　第１４４回講演会

日時　　２０２４年　１月１５日（月）14：00～
演題　　『ハマスとイスラエル/なぜガザで戦うのか？』
講師　　高橋和夫氏　大阪外語大卒（１９４９年）
コロンビア大、大学院・エジプト・イラン研究終了（１９７１年）、
クエート大研究員（―１９８３年）、放送大学名誉教授

申込　https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6　（または新三木会へ mail）
会費：・会場出席（受付払い）２千円、夫人千円、学生無料
・通信受講（振込）千円
A: 銀行振込：三菱東京 UFJ 銀行 / 船橋支店
普通預金 0132853 新三木会（シンサンモクカイ）
B: 郵貯銀行振込：郵貯銀行　普通 ・記号 10530
口座番号 36088281 則松久夫（ノリマツヒサオ）

****

事　務　局

****
天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１